

## 自然の再生とは何かが問われている三番瀬

ルポライター 永尾俊彦

### 市民運動によって守られた三番瀬

なぜ三番瀬<sup>さんばんぜ</sup>というのか、江戸時代の古文書には漁場の名称として三番瀬が載っているが、一番瀬、二番瀬の名称はなく、いわれはよくわかっていない。現在の三番瀬とは、東京湾奥部の千葉県市川市と船橋市の前に広がる約1200haの干潟と浅瀬である。

「干潟一里（4km）」といわれ、かつて東京湾の千葉県側には広大な干潟が広がっていた。

しかし、1945年には9449haあった東京湾の干潟は、94年にはわずか1640haに激減した。83%も埋め立てられてしまったのだ（環境省第2回、第4回自然環境保全基礎調査）。京葉工業地帯や都市再開発用地のための県の埋め立てで海を追われた漁民は、浦安から富津までの33組合で総計1万4264人にのぼる（『千葉県企業庁事業のあゆみ』）。

埋め立てに対し、「千葉の干潟を守る会」が71年に結成され、「東京湾の干潟保全、埋め立て中止」の国会請願をした。公害防止の世論が高まったことが追い風になり、72年の「公害国会」で請願は採択され、翌73年の国会でも採択された。しかし、その後も三番瀬は埋め立ての危機があったが、市民が埋め立て反対の署名運動などを展開、阻止してきた。このように市民運動によって守られてきた点が三番瀬の特色だ。

そして、2001年3月の千葉県知事選挙で堂本暁子氏が当選し、同年9月に公約通り埋め立て計画を白紙撤回した。

### 三番瀬の豊かさ

三番瀬では、今もノリとアサリを中心に漁業が営まれている。全体としては衰退傾向だが、2003年、04年は久々にアサリが大漁だった。地元の漁師によれば、アサリの水揚げ高が年間1000万円を超えた人もいたという。大都会を背景にした海で、まだこれだけの漁ができるのだ。ある漁師は「ア

サリがまたわいた。三番瀬は神様みて一な場所だよ」といった。

また、この三番瀬では05年に5000㎡もの巨大なカキ礁が「発見」され、報道された。それまでは、死んだカキ殻が堆積した島だと考えられていたが、「三番瀬市民調査の会」の調査でほとんどのカキが生きていることがわかったのだ。15cmほどのカキ1個が1時間に30～40ℓもの水をこす。だから、カキ礁周辺は東京湾とは思えないほど澄んでいる。

カキとカキのすき間には、千葉県のレッドリストで、絶滅が危惧される最重要保護生物に指定されているウネナシトマヤガイという親指大の二枚貝がぎっしりと棲息している。

その他、カキ礁はエビ、カニ、ハゼなどの稚魚のすみかにもなっている。同会の高島麗さんは「カキ礁は、豊かな生態系を支える要石（キーストーン）の役割を果たしています」という。

千葉県の調査では、三番瀬の干潟と浅瀬1200haで、化学的酸素要求量（COD）にして約13万人分を処理していると試算されている。三番瀬は天然の下水処理場でもあるのだ。

### 深められなかった自然再生の議論

02年1月、堂本知事は三番瀬の再生をどうするか話し合う「三番瀬再生計画検討会議」（通称円卓会議）を発足させた。委員には漁協、自然保護団体、地元市などの代表に学者ら24人が選ばれた。自然の再生計画を利害関係者が話し合いで策定しようとした先進的な試みだった。

しかし、対立ばかりが際立った。最大の対立点はカキ礁のある猫実川河口の評価と人工干潟問題だ。猫実川河口域は周辺の埋め立てによって潮の流れが遅くなり、海水がよどんで「ヘドロの海」になったと地元の市川市や漁協の代表らは主張する。だから三番瀬の自然を再生するために砂を入れてヘドロを埋め、人工干潟を造れば潮の流れが

戻り、ノリ養殖に良い環境になり、砂地を好むアサリも育つという。

これに対して、自然保護団体代表は人工干潟とは事実上の埋め立てで、カキ礁もある豊かな生態系がつぶされると批判、自然の再生とは陸地化されている所を海に戻すことだとする。

この対立は、自然の再生とは何か、保護とは何かという根本的な問題について共通認識が形成されれば、自ずから結論が出るはずだ。人間は自然を造れるのか、自然が自ら蘇ろうとするのを手助けできるだけなのかということを考えてみれば自明ではないだろうか。

けれども、共通認識は形成されず、砂投入（人工干潟）をやってみたくとか、護岸が老朽化していて人命にかかわるので改修を急げという議論に大半の時間が費やされた。

### 円卓・再生会議の意義と限界

さらに、議論を制約したのが第2東京湾岸道路計画だ。撤回前の三番瀬埋め立て計画では、第2湾岸は埋め立て地を横切って浦安市と船橋市を結ぶ予定で、両市にはすでに用地が確保されている。だから、第2湾岸を通すには三番瀬の上を高架橋にするか、トンネルを掘るしかないが、そうすると三番瀬の自然は壊滅する。

堂本知事は、一方で三番瀬は保全するといいいながら、他方で県議会の約6割を占める自民党が求める第2湾岸は建設すると明言している。

そこで、自然保護団体は第2湾岸を通すために県は猫実川河口域を人工干潟化したいと見ている。あらかじめ「自然再生」という名目で人工干潟にしておけば、カキ礁などもなくなっているのだから反対も弱くなるからだ。

円卓会議では、この第2湾

岸問題を何人もの委員が取り上げるよう提起したが、堂本知事の意向をくんだ会長の配慮で議題にされなかった。

また、三番瀬を国際的な湿地の保全条約であるラムサール条約に登録するための関係者の合意形成を進めることが円卓会議で決まったが、堂本知事は消極的だ。登録すると第2湾岸が造れなくなるからではないかと見られている。

結局、円卓会議は2年間で関連会議も含めて168回の会議を開き、04年1月、三番瀬の再生には海域をこれ以上狭めないことを原則とするの他、7つの再生のための具体的施策を堂本知事に提言した。しかし、その中で唯一県が前向きなのは干出域の形成、つまり砂投入による人工干潟化だけだ。

円卓会議は再生会議に引き継がれ、08年3月現在、人工干潟造成に向けての実験が始められようとしている。

千葉県の円卓・再生会議には、これまで官僚が決めてきた公共事業を市民の話し合いで進めるという画期的な意義がある。しかし、知事や県の政治的思惑で話し合いに大きな制約がある点その限界だといわざるをえない。

